

郭清十大動脈周囲リンパ節郭清が施行された。病理学的所見では胆嚢体・底部の結節型胆嚢癌 (50×45 mm) で、胆道癌取扱い規約に従い、hin2, binf0, ss, INFβ, ly2, v0, pn0, hw1 (3 mm), bw (h) 0, ew1 (4 mm) であり、リンパ節転移は 12c (1/1), 12bl (1/1), 12a2 (1/4), 12b2 (1/1), 12p2 (1/1), 13a (1/3), 9 (1/5) と n3 (+) であった。退院後経過：術後5月目、画像上、左腎静脈周囲のリンパ節転移が、術後8月目には組織学的に Virchow 転移が診断された。再郭清の適応は無いと判断し、経口 5FU (150 mg/day) 投与に加え、FM 療法 (5FU 250 mg: div, MMC 4 mg, iv/month) の投与を開始した。治療前 108 ng/ml あった CEA は FM 療法開始後3月で 5.1 ng/ml と著明に減少し、大動脈左側リンパ節も加療後1年で CT 上著明に縮小し、同様に1年6月後ではほぼ消失した。術後約4年6月および Virchow 転移後3年6月の現在も CR を持続している。胆嚢癌再発の治療にあたっては、外科的切除のみならず、化学療法を含めた集学的治療が必要と思われた。

25) 胆管細胞癌の治療成績

佐藤 攻・清水 武昭
 小山俊太郎・広田 亮 (信楽園病院外科)
 柳沢 善計・村山 久夫 (同 内科)

これまでに経験した胆管細胞癌11例について治療成績をまとめた。【結果】1) 11例中6例は無症状で健診を契機として診断されていた。2) 腫瘤型9例、浸潤型1例、乳頭型1例の3型に肉眼分類された。腫瘤型の3例は切除不能の進行癌であった。8例に肝切除およびリンパ節郭清術が施行された。3) 切除8例中3例に肝内転移、4例に脈管侵襲、5例にリンパ節転移を認め、乳頭型の1例の他はすべて進行癌であった。4) 切除時に肝内転移が陽性であった3例 (すべて腫瘤型) は残肝内転移で再発し術後3年生存例はなかった。術後7年半を最長とし4例が無再発生存中であった。【まとめ】胆管細胞癌は高率にリンパ節転移をとまっており、治癒切除のためには肝外胆管癌に準じたリンパ節郭清が必須である。残肝再発の危険性の有る症例については、積極的な治療法が必要であると思われた。

II. 特別講演

「胆管細胞癌の病態と治療」

三重大学医学部第一外科教授

川原田 嘉文 先生

第6回新潟外科系領域 バイオメディカル研究会

日時 平成7年6月9日 (金)

午後6時～8時

会場 新潟グランドホテル

3階 悠久の間

I. 一般演題

1) 関節内骨折に対する吸収性内固定材を用いた治療経験

大森 豪・長谷川和宏
 堀田 哲夫 (新潟大学整形外科)

四肢及び関節の骨折治療を扱う整形外科医にとって抜釘を必要としない内固定材は一つの夢であった。現在でも骨折内固定材の中心は Stainless steel であるが、近年吸収性縫合糸である PGA (Vicryl) や PLA (Dexon) をもとにして生体吸収性の骨折内固定材が開発され臨床応用されている。現在生体吸収性内固定材として用いられているのは、ポリ-L-乳酸 (PLLA) とポリジオキサノン (PDS) の2種類である。PLLA は初期強度が皮質骨と同等で screw, rod, pin の option がある。PDS は剪断力は強いものの強度は弱く pin タイプしかない。PLLA, PDS 共に加水分解で吸収され、PLLA の場合12週で強度は60%に低下する。

我々はこれまでに肘関節脱臼骨折に伴う尺骨鈎状突起骨折 (12才, 男) に PLLA screw を、膝蓋骨脱臼に伴う膝蓋骨軟骨骨折の2例 (12才, 女, 30才, 男) に PDS pin を用いて骨折部の内固定を行い、いずれも術後短期間であるが極めて良好な成績を得た。

現在までのところ生体吸収性内固定材の適応は関節内骨折が最適であり、長管骨に対しては手指、足趾を除けば単独での使用には不安があり、他の固定法との併用が薦められる。また骨癒合に3か月以上を必要とする部位やストレスの大きい部位には注意が必要である。さらに合併症として、折損、骨癒合不全、無菌性腫脹などが報